

いたずら者の野兎の話

エチオピア・スーダン国境の近くに住むアニアック族の民話



【元の文章です】

ある日野兎は河へ魚を獲りに行った。彼は大量の魚を家へ持ち帰って来た。(母方の)伯父がそれを見て「何処でこんなに獲って来た？」と聞いた。野兎が「河でさ」というと、伯父は「では明日私も行って、お前たちにもどっさり獲ってきてやろう。だがどうやって魚を獲るのかね」と聞いた。それで野兎は(例の如く伯父貴をからかうことを考えて)、「そうだな、先ずともろこしの粉を一つかみ持って行きな。水の澱んでいるところがあるから、そこへ行って水面に粉を散布しな。そうしたら魚が集って来るから、水に背中を向けて、手を拡げて後ろ向きに飛び込みな。すると水面近くに集って来た魚が陸へはねあげられるから、いくらでも獲れるよ」と教えた(実は野兎は、水の澱んだところには背に棘のいっばい生えている魚が密集していて、ともろこしの粉をまいたらその魚が水面に浮かんで来てそれを食べようとするという、現実の世界では子供たちでも知っている魚の習性を計算に入れていているのである)。伯父はいわれた通り河へ行って、沢山の漁獲を期待しながら、少しでも多くの魚を陸へはねあげてやろうと思つて、後ろを向いてできるだけ大仰に飛び込んだ。次の瞬間「あちちち」と彼は悲鳴をあげて、ほうほうのいでで陸に這い上った。彼の背中は棘つきの魚でいっばいで、膨れあがつていた。這い上ったところにちようとヌア(ヌアル)族の男が通りがかったので、彼にたのみこんで棘の生えた魚を引き抜いてもらつて、ほうほうのいで家に帰って来た。